

保育者の力量形成を促すカリキュラムの検討（Ⅲ）

一月週案・要録の書き方理解と作成課題を通して－

小 山 優 子

（保育教育学科）

島根県立大学松江キャンパス
研 究 紀 要

第 58 号

（21～31頁）別刷

2019年3月

保育者の力量形成を促すカリキュラムの検討 (Ⅲ) 一月週案・要録の書き方理解と作成課題を通してー

小 山 優 子

(保育教育学科)

A Study on Improvement of the Practical Teaching Abilities in Junior College
for Nursery and Kindergarten Course (Ⅲ)

Yuko KOYAMA

キーワード：保育者養成カリキュラム Curriculum for Nursery and Kindergarten Course
指導計画 teaching plan 月週案 monthly and weekly teaching plan
幼稚園幼児指導要録・保育所児童保育要録 the Cumulative Record for Kindergarten
and Nursery School

1. はじめに

本稿は、保育士・幼稚園教諭を養成する2年間の保育者養成における保育実践力を高めるための体系的なカリキュラムの構想を目的としたもので、「保育者の力量形成を促すカリキュラムの検討 (Ⅰ) (Ⅱ)」の継続研究である。(Ⅰ)においては、短大1年4月から1年3月までの養成1年目に学生が学ぶべき保育理論や指導計画の立案方法に関する知識・技能をどのような学習プロセスで学ぶかについて論じた。(Ⅱ)においては、短大2年4月から2年11月幼稚園実習終了前までの養成2年目に学生が学ぶべき保育の実践方法や部分指導案・日案などの指導計画の立案方法に関する知識・技能をどのような学習プロセスで学ぶかについて論じた。本稿では、学生の2年11月の幼稚園実習終了時で学生が習得している力を確認した上で、幼稚園実習終了から卒業までに保育者として身につけておくべき保育に関する知識・技能を習得する学生の効果的な学習プロセスについて検討した。特に、保育現場で担任

保育者となった際に日常的に作成しなければならない月案や週案の書き方、保育日誌等の保育記録の書き方、年度終わりに作成する幼稚園幼児指導要録や保育所児童保育要録、認定こども園こども要録の書き方を理解し、それらの文書を卒業前の課題として学生が実際に書いてみることで体験的に理解することにより、保育現場で通用する力を身につけることを目指した。すなわち、保育者養成校における学生への指導計画の書き方や指導計画の記入方法の理解から、保育日誌等の記録の書き方や要録の書き方理解までの一貫した保育の計画・記録のPDCAサイクルを理解し実践できるためのカリキュラムの検討を本研究の目的とする。

2. 研究方法

本学保育学科のカリキュラムを見直し、保育士養成課程・幼稚園教諭養成課程科目の学習内容やその科目で学習すべき内容・方法を考察し、どの授業で何をどのように学ばせていくのか、特に2年11月

の幼稚園実習終了時点で学生がどのような力を身につけているのかを確認し、その上で保育者として理解しておくべき月案・週案などの指導計画の作成や保育日誌などの書き方、さらには要録の書き方などの記録物の理解の指導過程とその結果をまとめることにより、短大2年間での保育実践力を高める養成カリキュラムのあり方を明らかにする。

1) 対象

保育学科の1・2年次の学生を対象とし、2年間における保育の専門科目のカリキュラムや授業内容を分析した。本研究の対象としたのは、平成27～29年度までの3年間分の授業実践と学生の指導計画課題、子どもの記録と要録課題である。

2) 分析方法

研究方法は、学生に対する講義などの教育実践の過程を振り返り、学生の保育に関する実践知の習得状況とそれを踏まえた授業改善の過程をまとめたアクションリサーチの手法をとる。また、学生の作成した指導計画などの保育に関する記述物（レポート課題）などの質的データから、学習の理解深化プロセスを追い、学生の記述から授業での保育実践に関する知識の理解を明らかにするエスノグラフィーの手法を基盤とした質的研究を行った。

3. 保育者養成カリキュラムと学習内容

短大2年間における学生の学習過程を踏まえ、次の3つの時期に分類し（表1）、その期間に学生が習得する保育に関する知識・技能を分析することとした。

表1. 短大2年間における3つの教育段階

期	時期	指導計画の習得過程
第1期	短大入学～1年終了	指導計画の意味や書き方を理解する
第2期	2年開始～2年11月幼稚園実習終了	実習で実施する指導計画を作成できる
第3期	2年11月～短大卒業	就職に向け、保育現場で作成する指導計画を理解する

本稿では、第3期の指導計画の作成方法の習得の時期となる、2年11月の幼稚園実習終了から2年2月の卒業時までの学習過程について論じることとする。この時期は、幼稚園実習の事後指導と、保育士資格や幼稚園教諭二種免許状取得のための必修科目である「保育内容総論」「教育方法の研究」を10月からの継続で学ぶ時期である。これらの授業科目や実習後の学びの過程において、保育の実践的な知識・技能を習得するための授業内容や学生に課すレポート課題を実習との関係から見直し、実習中の学びを高めるための保育理論のさらなる深化と指導計画の作成の習得を目的とした教育内容を考案した。本稿では、第3期の2年次の教育内容について考察する（表1・表2）。特に第3期は、本学保育学科2年生の保育士・幼教必修科目である「保育内容総論」「教育方法の研究」の授業実践と学生に対する指導過程から授業で学ぶ学習内容を示し、その上で学生に課した「運動会の活動を中心とした10月の月週案の作成課題」と「保育所実習や幼稚園実習で観察・記録した3・4・5歳児3学年分の幼児の指導要録の記述」の課題レポートを使い、学生の保育実践知に関する習得状況を分析した。

1) 子どもの記録のまとめ方の習得

(1) エピソード記録の書き方の習得

保育学科の2年次の9月と10～11月の幼稚園実習では、合計4週間¹⁾の実習日誌を毎日書くことを必須としている（図1）。実質20日以上の日数になるように幼稚園実習の日程を組んでいるため、毎日子どもの活動に着目したエピソード記録を書くように指導した。特に「反省・感想」の欄には、幼児の活動を中心に記述し、1日の保育を振り返っての感想をまとめるようにし、幼児一人ひとりの言葉や活動から個人差や年齢差を分析し、それに基づく保育者の関わりを考察するようにした。またエピソード記録も子ども個人の遊びの様子や生活の取り組みに着目したり、自然にできている子どもの遊びグループや意図的な班活動・グループ活動、学級全体といった単位で子どもの記録をとり、子どもの発達の視点や子ども同士の関係性などから子どもの姿

表2. 第1～3期の保育者養成カリキュラム（保育士資格・幼稚園教諭免許）

	【第1期】 短大入学（1年4月）～1年終了（1年3月）の目標		【第2期】 2年開始（2年4月）～2年幼稚園実習終了（2年11月）の目標					【第3期】 2年幼稚園実習終了（2年11月）～2年卒業前（2年2月）までの目標	
時期	1年前期	1年後期	2年前期			2年後期（11月まで）		2年後期（11月から）	2年後期
	1年4～9月	1年10～3月	2年4月～7月	2年8月	2年9月	2年10月	2年10～11月	2年11月～2月	（卒業前課題）
授業科目	「保育原理」（保育士必修）	「保育課程論」（保育士必修）	「保育者論」（保育士・幼教必修）	「保育実習Ⅱ」	「教育実習Ⅰ」	「保育内容総論」（保育士必修）	「教育実習Ⅱ」	「保育内容総論」（保育士必修）	「保育内容総論」（保育士必修） 「教育方法の研究」（幼教必修）
			「教育実習指導」（幼教必修）						
教育目標	・保育者に必要な保育全般の知識を理解し、保育実践のために必要な保育目標や保育方法などの視点を身につける。	・「全体的な計画（旧保育課程）」「教育課程」編成の意義と方法を理解し、指導計画との関連性を理解する。 ・指導計画の意義や種類、作成方法について理解した上で、指導計画の体裁を保持して部分指導案を形にできる。	・生活と遊びを中心とした保育を行う保育者の役割と実際の子どもへの関わり方などの保育の実践方法を理解する。 ・指導計画の書き方について理解し、保育所実習や幼稚園実習で、設定保育の部分指導案や日案などの指導計画が実際に書ける。	保育所実習（10日間） 幼稚園実習（2週間）	幼稚園実習（2週間）	・子どもの生活や遊び場面において子ども一人ひとりを理解しながらもグループやクラス全体の状況把握を同時に行い、多数のクラスの子どもの保育者1人で保育する際の個別理解と集団理解の方法を理解し幼稚園実習で試みる。	幼稚園実習（2週間）	・保育所実習や幼稚園実習を通して個々の子どもやグループ、学級全体に関する個別・発達を考慮したエピソード記録を書ける。	・実習中の子どもの姿を思い浮かべながら、年少・年中・年長の子どもの（3～5歳児）の保育所児童保育要録、幼稚園幼児指導要録を書く。
						・子どもの生活や遊び場面において子ども一人ひとりを理解しながらもグループやクラス全体の状況把握を同時に行い、多数のクラスの子どもの保育者1人で保育する際の個別理解と集団理解の方法を理解し幼稚園実習で試みる。		・保育現場で担任保育者が書く保育日誌や、子どもの個人記録・経過記録の書き方を理解する。	
						・子どもの生活や遊び場面において子ども一人ひとりを理解しながらもグループやクラス全体の状況把握を同時に行い、多数のクラスの子どもの保育者1人で保育する際の個別理解と集団理解の方法を理解し幼稚園実習で試みる。		・保育現場で担任保育者が書く保育日誌や、子どもの個人記録・経過記録の書き方を理解する。	
						・子どもの生活や遊び場面において子ども一人ひとりを理解しながらもグループやクラス全体の状況把握を同時に行い、多数のクラスの子どもの保育者1人で保育する際の個別理解と集団理解の方法を理解し幼稚園実習で試みる。		・保育現場で担任保育者が書く保育日誌や、子どもの個人記録・経過記録の書き方を理解する。	
						・子どもの生活や遊び場面において子ども一人ひとりを理解しながらもグループやクラス全体の状況把握を同時に行い、多数のクラスの子どもの保育者1人で保育する際の個別理解と集団理解の方法を理解し幼稚園実習で試みる。		・保育現場で担任保育者が書く保育日誌や、子どもの個人記録・経過記録の書き方を理解する。	
					・幼稚園実習において、設定保育などの部分指導案や遊びを中心とした日案を異なる種類、異なるタイプの様式で実際に指導計画が書ける。		・幼稚園実習を通して、子どもの遊びや生活に関するよりよい環境構成の方法や保育者の指導・援助の具体的視点と方法を身につける。	・10月末の運動会に向けて、クラスの活動を月始めから展開する10月の月案、週案を考え、実際に指導計画をパソコンで作成する。	
						・幼稚園実習において、設定保育などの部分指導案や遊びを中心とした日案を異なる種類、異なるタイプの様式で実際に指導計画が書ける。		・幼稚園実習を通して、子どもの遊びや生活に関するよりよい環境構成の方法や保育者の指導・援助の具体的視点と方法を身につける。	・10月末の運動会に向けて、クラスの活動を月始めから展開する10月の月案、週案を考え、実際に指導計画をパソコンで作成する。
						・幼稚園実習において、設定保育などの部分指導案や遊びを中心とした日案を異なる種類、異なるタイプの様式で実際に指導計画が書ける。		・幼稚園実習を通して、子どもの遊びや生活に関するよりよい環境構成の方法や保育者の指導・援助の具体的視点と方法を身につける。	・10月末の運動会に向けて、クラスの活動を月始めから展開する10月の月案、週案を考え、実際に指導計画をパソコンで作成する。
						・幼稚園実習において、設定保育などの部分指導案や遊びを中心とした日案を異なる種類、異なるタイプの様式で実際に指導計画が書ける。		・幼稚園実習を通して、子どもの遊びや生活に関するよりよい環境構成の方法や保育者の指導・援助の具体的視点と方法を身につける。	・10月末の運動会に向けて、クラスの活動を月始めから展開する10月の月案、週案を考え、実際に指導計画をパソコンで作成する。
						・幼稚園実習において、設定保育などの部分指導案や遊びを中心とした日案を異なる種類、異なるタイプの様式で実際に指導計画が書ける。		・幼稚園実習を通して、子どもの遊びや生活に関するよりよい環境構成の方法や保育者の指導・援助の具体的視点と方法を身につける。	・10月末の運動会に向けて、クラスの活動を月始めから展開する10月の月案、週案を考え、実際に指導計画をパソコンで作成する。

を捉え、分析的に記述することを指導した。「反省と感想」の欄は、特に野線などは設けていない自由記述形式をとっているが、学生はほぼ毎日、600～700字程度のエピソード記録を書いていた。そこで、毎日子どもや保育などに関する様々な視点から自分なりの着眼点をもってエピソード記録をまとめるように指導した。

（2）子どもの個別記録・経過記録の書き方の理解

幼稚園実習で毎日着眼点をもって子どものエピソード記録を書き、実習中にその書き方を担任の先生に指導していただく経験をした上で、幼稚園実習終了後の「保育内容総論」の授業において、保育現場においてクラス担任が実際に作成する子どもの個別記録や経過記録を参考に配布し、子どもの記録の書き方を説明した。その際、3歳未満児の保育所や認定こども園では、指導計画の月案の作成の中で、子ども個人に関する個別の指導計画も立案しなければならないことを説明し、具体的な月案の個別計画の書き方も参考例を示しながら説明した。3歳未満児については、月案の個別の指導計画に対応させ

て、子どもの個別記録や経過記録を記述することが保育指針で義務づけられていることを説明した。特に、個別の指導計画を含む月案がPDCAサイクルのP（Plan）、保育実践がD（Do）、子どもの個別記録や経過記録の作成がC（Check）に該当し、次の改善であるA（Action）に結びつけていくような評価の仕方を行うことが重要であることを解説した。

（3）保育実践の反省を含む保育日誌の書き方の理解

9月と10～11月の合計4週間の幼稚園実習では、図1の実習日誌を毎日書くが、左のページには子どもの活動（日課）に基づいて時系列で保育者の指導・援助の様子と環境構成の工夫、保育の際の気づきや考察を書く欄を設けている。またこの時間の流れにそった記録は、毎回同じ内容にならないように、日によってはこの部分をしっかりと書くといった形で焦点化しながら20日で様々な部分が詳しく記載できるように書くよう指導した。また右ページには、「幼児の指導や援助」欄を設け、実習生が指導教諭の子どもへの具体的な援助や指導、環境構成や準備等を見て読み取ったこと、気づいたことや解釈したこと

島根県立大学短期大学部									
実習 園名		指導 教諭名		実習生 氏名		印			
平成 年 月 日 () 天 (実習 日付)		授業 クラス		(歳児)		在籍 名 (うち欠席 名)			
今日の実習目標 ※実習生にとっての、今日1日の実習目標を記述する。									
時刻	幼児の活動 (目録)			保育者(教諭・実習生)の指導・援助			気づきや考察・環境構成など		
※開始時刻を記入	【幼児の活動】 ●公園から帰園までの間で、保育に参加した全ての幼児の活動を要約し、時系列にまとめて記入する。 ●幼児の活動のうち、毎日同じような活動をする部分については、内容を簡略化・省略したり、特に書いておきたい幼児の活動に焦点化して詳しく書く形にしてもよい。 ●「幼児の活動」と「保育者の指導・援助」のつながりを意識して書く。			【保育者の指導・援助】 ●幼児の活動に対し、実習指導教諭がどのような言葉かけや関わりをしていたのか、また、個々の幼児や全体の幼児(グループ、集団)に対して、指導教諭がどのようなねらいや願い・意図を持って関わっていたのかなどを記述する。 ●保育者の指導・援助は、行動の羅列にならないようにする。保育者がなぜそのような指導・援助をするのかという 保育者の関わりや意図やねらいも含めて記述する。 ●指導教諭の行動だけではなく実習生の行動も記述するが、 指導教諭の行動と実習生の行動をわけて、わかりやすく記述する (色分けする、違う印をつけるなど)。 ●教諭・実習生の行動については、幼児に対する指導・援助の部分のみを記述し、雑務などの仕事内容は省略する。			【環境構成】 ●幼児の活動が円滑に展開するために、どのような場所でのどのようなものを準備し、どのような環境づくりがなされていたかを記入する。保育室内や園庭の様子を図(環境図)などで示してもよい。 【気づきや考察】 ●幼児の活動についての気づきや、指導教諭の指導・援助についての考察などを記述する。また、幼児に対する実習生自身の指導・援助についても、分かったことなどを記述する。左の2つの順(幼児の活動、保育者の指導・援助)を実習生自身が読み解き、分析するために、この欄を活用する。		
幼児への指導や援助 (気づきや指導教諭の加減等) 指導教諭の所見									
●指導教諭から直接受けた指導内容を記述する。 ● 学生が指導教諭の幼児への具体的な援助や指導を解釈して取り入れたこと、新たに気づいたことなどを記述する。 ・参考になった環境設定や準備について ・保育者の幼児への関わりや配慮で学んだこと、など。 ●指導教諭に対する指導上の質問なども記入する。									

図 1. 幼稚園実習における実習日誌の様式 (A3) ※実施要領記載内容

を記述したりし、指導教諭への質問なども記載する欄を設けた。また、子どものエピソード記録と絡めて、保育者の言葉かけや関わり方、環境構成の中で気づいたことを書いたり、実習生が子どもと関わる中で心がけて関わったことや試してみたことなどの実習生自身の関わりもふり返りながら自由に記述できるようにした。さらには、責任実習として行う部分指導や全日指導についての反省や考察なども記述できるようにした。ここでは、保育者の指導・援助は、必ず子ども個人または子どもたちなどの集団の姿があり、その実態にふさわしい関わりや配慮であるのかを検討することが自己省察であり、保育者の自己評価につながることを解説した。

(4) 幼稚園幼児指導要録・保育所児童保育要録・認定こども園こども要録の書き方の理解

4週間の幼稚園実習後の「保育内容総論」の授業の中で、保育現場で働く保育者がその学年の年度末に作成しなければならない「幼稚園幼児指導要録」

(図2), 「保育所児童保育要録」(図3), 「認定こども園こども要録」の様式と書き方例を配布し、記述の方法を解説した。この要録は、幼稚園や認定こども園では、年少(3歳児)、年中(4歳児)、年長(5歳児)の記録をまとめ、保育所は一般的には年長(5歳児)のみの記録をまとめるものであるが(どの学年分を書くかについては、各市町村単位で決めることとなっている)、子どもの4月から翌年3月までの1年間の育ちの記録をまとめて次のクラス担任に引き継ぐための書類であり、年長1年間の記録は卒園後、子どもの進学する小学校に送付する保幼小連携のための書類でもある。

この要録は、子どものエピソード記録をもとに、子どもの育ちの過程を時間の経過とともにまとめていくものであるが、子どもの育っている部分と合わせて、どのような保育者の指導・援助によりそのように変わっていったかを記述する、保育者の指導の過程も併せて記載したものである。基本的には、幼稚園実習で記述したエピソード記録を保育者の関わ

幼稚園幼児指導要録(指導に関する記録)

[illegible][illegible]

(様式の参考例)

幼稚園幼児指導要録（最終学年の指導に関する記録）

[illegible][illegible]

図2. 幼稚園幼児指導要録の様式

りと合わせて書けばよいこと、保育者の指導・援助によって、どのように変わっていった・育っていったのかを書けばよいことを説明した。幼稚園実習での記述と異なる部分は、幼稚園実習では、子どもの姿を見ながら子どもの育ちや課題面などを書いていったが、要録では「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域の観点から子どもの育ちを記述すること、特定の領域にかたよった記述ではなく、子どもの育っている面を5領域の多方面から記載することで子どもの1年間の育ちが見えてくるので、そのように書くことを心がけるように説明した。また平成29年の幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改定により「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10項目挙げられたことにより、卒園までに保育者が育つことを意識しながら保育をすること、「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」として挙げられた「育みたい資質・能力」の3つの力とともに子どもが身につけるべき姿やねらいをもって保育を行うこと、

卒園時に記載する要録には10の姿を踏まえて記載することを解説した。

(5)「3.4.5歳児の幼稚園幼児指導要録と5歳児の保育所児童保育要録」の作成課題

要録の書き方についての講義後、授業の最終回に学生に要録作成のレポートを課した。レポート課題は、2年次の保育所実習や幼稚園実習中に観察・記録した3歳以上児の子どもの姿を思い浮かべながら、幼稚園幼児指導要録には3～5歳児の3人分と保育所児童保育要録には3～5歳児の1人分の子どもの育ちを記載する課題を出した。対象児は、実習中に配属されたクラスの中で4人の子どもをイメージしながら記載すること、要録にはできれば様々な学年の子どもを書くことが望ましいが、実習中に配属されたクラスがすべて同じクラスの場合、3学年分の子どもの姿が書けない場合もあるため、4人とも同年齢になってよいこととした。作成の際には、授業で解説した要録記入の参考例を参照しながら、

計画の理解

11月の幼稚園実習が終わった段階で、短大2年間で学んできた保育のカリキュラム理論のまとめを講義で行った。園で1つ作成しなければならない「教育課程」「全体的な計画(旧.保育課程)」²⁾の具体例を実際に数種類見た上で、クラス担任が作成しなければならない指導計画の種類について具体例を見ながら確認した。特に長期的な計画に位置づく「年間計画」「期間計画」は、それぞれ単独で作成する場合もあれば、2つを組み合わせる年間計画の中に期間計画を入れ込んで作成することもあること、年間計画は各クラス担任が年度初めに作成するもので、正規職員の保育者として採用された場合には、就職後すぐの4月に年間計画を作成することもあることを話した。また、教育課程や全体的な計画、年間計画などには、特定の内容に関する計画を立案する場合もあり、保健計画、食育計画、給食計画、預かり保育の計画、防災計画など、園の運営のために必要な全体的な計画を園で作成し、職員が共通理解していくことが必要であることを話した。

保育所児童保育要録（保育に関する記録）

本資料は、就学し際に保育所と小学校（義務教育学校の前期課程及び特別支援学校の小学部を含む。）が子どもに関する情報を共有し、子どもの育ちを支えるための資料である。					
	保育の組織と子どもの育ちに関する事項		最終年度に至るまでの育ちに関する事項		
氏名			(転移年度の重点)		
生年月日	年 月 日				
性別	(個人の重点)				
ねらい (発達を促す視点)					
人	<p>起ち上がり姿勢と行動し、光刺激を味わう。</p> <p>自分の体を中心とした動きし、遠くまで運動しようとする。</p> <p>健康、安全な状況に必要な言葉や態度を身に付け、共通をもって行動する。</p> <p>保育園での生活を楽しく、自分の力で行動することの充実感を味わう。</p> <p>一人ひとりの人違い、関わり方を認め、工夫し合う。協力しながら一緒に活動することを楽しみながら、質問や情報交換を行う。</p> <p>社会生活における望ましい言葉や態度を身に付ける。</p>		<p>(保育の展開と子どもの育ち)</p>		
人	<p>身近な環境に慣れ合い、自然と共にありながら生きようとする意欲や関心をもつ。</p> <p>身近な環境に自分から関わろう。発見を楽しんだり、発見したことを友達に教わり入ろうとする。</p> <p>身近な事象を見たり、考えたり。感じたことや調べたこと、動物や植物の成長、天候などに対する感覚を豊かにする。</p> <p>自分の気持ちや言葉を表現できるようになる。</p> <p>人間の言葉や表情だけでなく書き、自分の経験したことや考えたことを伝え、伝えたことがわかるようになる。</p> <p>日常生活に必要な言葉や知識が自分ごとにならなくとも、基本の動作などに親しみ、言葉で表わす経験を積み、発音正しく会話できるようにする。</p> <p>いろいろなことの楽しさを伝えることができるようになる。</p> <p>遊びを通して考えたりとを自分なりに表現して楽しむ。</p> <p>自分の得意なイメージを書いたり、描きながら表現を楽しむ。</p>		<p>幼児期の終わりにまでに育ってほしい姿</p> <p>※各項目の内容等については、別添「別添1」すべし「別添2」の両方を見て頂き、「別添3」を参照してください。</p> <p>健康な心と体</p> <ul style="list-style-type: none"> 自立心 協調性 道徳性・規範意識の芽生え 社会生活との関わり 思考力の芽生え 自然との関わり・生命尊重 歌や文芸、図画や文字などへの関心・感覚 言葉による伝え合い 豊かな感性と表現 		
人	(特に配慮すべき事項)				

[illegible]

図3. 保育所児童保育要録の様式

「子どもの育ちに関わる事項」は入園当初の姿から保育所生活での全体的な育ちを書くこと、また、最終年度における保育の過程と子どもの育ちの姿を理解する上で特に重要と考えられることを書くこと、指導要録・保育要録・子ども要録共通の「学年の重点」「最終年度の重点」は1年間のその学年の保育目標を書き、「個人の重点」はその子ども個人の課題面やねらいを書くこと、三要領共通の「指導上参考となる事項」は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域の側面から子どもの育ちをバランスよく書くことが重要であると話した。そのため、5領域や養護に関することは何かを幼稚園教育要領の第2章や保育所保育指針の第1.2章を参照した上で、子どもの育ちを書くように伝えた。

2) 月案・週案等の指導計画の立案を通じた保育技術の習得

(1) 教育課程（全体的な計画）や年間計画・期間

(2) 日案、暦によらない指導計画の作成の理解

幼稚園や保育所、認定こども園では、基本的に年・期・月・週などの期間で区切った指導計画を作成するのが通例であるが、場合によっては期間を超えて、活動内容に特化した指導計画を作成する場合もある。例えば、〇月の誕生日会の計画、遠足（園外保育）の計画、生活発表会の計画など、小学校等の単元計画のような、暦によらない指導計画を作成する場合もある。保育現場に就職すると、クラスの主担任であれば様々なクラスの活動の計画を暦によらない指導計画で報告する必要もあり、また園全体で取り組む行事や活動の主担当となった場合、保育者間の役割分担や保育者の動きの確認などを職員会議などで協議する場合の実施計画案を作成し、活動のねらいや日程、準備物や業務分担の確認をすることもある。そのため、活動別の指導計画の作成方法についても様々な指導案例を示しながら解説した。

(3) 「月案・週案」の作成原理の理解

4 歲兒○○○組研究保育指導案(日案)

実施日：平成〇年〇月〇日(火)
在籍：男児8名 女児7名 計15名
指導教諭：〇〇〇〇先生
指導者：小山 優子

- ### 1. 子どもの実態と保育者の願い

- [illegible]

〈好きな遊びへの数り組みと友だちへの関わり、保育者の思いについて〉

- 「やうちようちまがきり」の巻のこと
 「やうちようちま、この際とまれ」と、やうちといっている家だも四士で近くにいたり、カウ一帽子をかぶって待っていたりとか、この辺にいろいろの事情が見られる。もちろん役の子どもも、つかまされぬように逃げることもできなく、神懸かりや呪いというように家かき役ができていられるよである。一方、つかまされにくために、安室地帯から出てくる子どもや、どうぶつに似ていろいろのふかい子がよくある。彼等が、もちろん役の子どもより役をするよである。逃げるように呪いやいろいろな家かきで捕まえられるよである。また、いろいろな役になった際、かまきり役の子どもも「つかまえよう」と具體的な役割が与えられるよである。

- 踊ったり楽器を鳴らして遊ぶ
- 歌、歌、舞などがテーマに合わせて踊ったり、スズやタンバリン、子どもが自分で作った楽器などを鳴らして楽しんでいる。割りばしの先にリボンをつけて跳っていたりする姿も見られる。YU、RS も加わり、一緒に踊っていることもある。友だちと一緒に踊る楽しさが子どもたちの間で共有できるよう、

- きの様子を認めたり、保育者も仲間となり踊ったりする。また、踊りのふりつけでおもしろい部分を伝えたり、楽器の使い方の見本となり、やり方を示したりする。

- セーラムーンのままごと遊び
セーラムーン役になり、変身したり戦いに行ったりしながら、一方で軍の中で食事などをしている。ままとごコーナーで活動していることが多かったが、屋下の秘木を家に発見して、その中へままと道具を持ち込んで進んでいる。張を中心に、順、市が一緒に進んでいるが、陣りを一緒に襲っていたことがきっかけとなり、順も関わってきた。

家の部分を、「ここ、おふろ」などと見立てながら作っている様子や、料理をしている様子、友だちとのやりとりの様子を認め、楽しい雰囲気の中で遊べるようにする。また、落ち着いて活動している場面（家での活動と、動的な場面（変身したり、走り回ったりする活動）の両方を見ながら、安定できる場所）が子どもたちで作り出せるようにする。

- 色水づくり
オシロイバナの花をつぶして色水をつくる活動が、NHから始まりました。IZ、SK、NH、SY、YA-YA、YTにも広がっている。つぶした花には水分量を考慮したり、ペットボトルに入れたりする遊びが楽しめる。花をみつけ、でちゃでちゃにすることで色が出てくる楽しさを認める。また、他の素材が使えないかなど、自然の環境にも目が向くような言葉かけをする。

○ ヒーローごっこ基地作り
草薙や真下で、ボク、ハチ、ワズ、バ、Y、Tなどか、遊びのメンバーを交えながら基地作りや戦いごっこをしている。米沢川の緑地で走り回り、種々のカラークラスから色とりどりの着るものも見える。カレンジャーやジュウレンジャー、ウルトラマンなど、他のイメージが個々に通っているが、6人で遊ぶ時には、戦いのイメージで遊んでいる。真下では、10・11の子らが遊び、カレンジャーとゴジラの戦いをしたり、基地を作ったりすることが多い。何人集まっているのかを見守りながら、メンバーの意識の高さのり、イメージを使えるようになるような言葉をかけしゆく。また、カラークラスから飛び降りるなどの動きや遊ばせでは、安全面を記せる。

- かけこ
運動会に向けてみんなで練習したかけこをやりたいと言い、取り組んでいる子どもがいる。走る、競争することだけでなく、ゴールテープを持つ役、番でのスタートの合図をする役も楽しんでいる。
安全な種かめながら、悪いやり方を罰がめさず味わえるようにする。また、やらない役別に人気が集まる時には、それぞれの気持ちに配慮させるよう。罰し合いの機嫌直し役などをする。

＊ W、IZ は、やりたい遊びがなかなか見つからない場合がある。しかし、友だちの遊びの様子を見ていることで興味が湧いてで参加したり、そこから少しずつ遊びに追加していく姿(委曲)に合わせて、嬉しく参加を促したりするなど、も見られる。また、IZ にとっては、その場の存在や友だち、友だちとやろうとする遊びにより安心し、遊びの輪を委ねられ、遊びの輪に帰属感があるように思われる。その様子を見守りながら遊びに臨みたい。友だちの様子を知りたいし、なにより、遊びに受け入れてもらえるようにしたい。また、自分では遊びのやり遊びの様子を認め、自信が持てるようにしたり、その中で遊ぶのがいいよと促すなど、つづいて、

2. ねらい及び内容
 ①やりたい遊びに取り組み、十分に楽しむ。
 ・周りの友だちや保育者の刺激を受けて、自分もやってみようとしてたり、自分からやりたい遊びに取
 り組む。

- ・やりたい遊びをするために、必要な道具を自分たちで準備したりする。
- ◎ 周囲の友だちとの関わりを楽しむ。同じイメージを持って楽しむ。
- ・友だちと場所やもの、行動を共有しながら遊ぶ。
- ・気の合う友だちと勝手に遊ぶ。

- みんなで一緒に片付けをすることで、片付ける気持ちよさを知る。
- 片付けをする中でものの扱い方や安全について気づく。

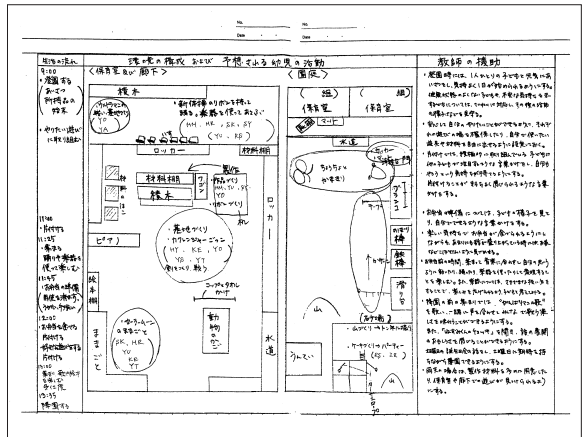


図4. 幼稚園実習における日案の様式（B4）

クラス担任が1人の場合または主担任となった場合は月案や週案などを作成しなければならないが、保育現場に出た際に月案や週案が書けるように、様々なタイプの月案・週案を示し、書き方の要点を解説した³⁾。月案や週案は文部科学省・厚生労働省から示された統一様式などではなく、園により月案や週案の様式や記述のスパンが決められているのが実情である。例えばある保育所では、月案と週案を別々の様式で両方書く園もあれば、月案の中に週案が組み込まれている月週案の様式の園、月案を2か月分スパンで1枚の月案に書く園、ある幼稚園では月案は立てずに園の教育課程を基盤に週案を1週間単位で毎週書く園、1週間分の週案と日誌が組み合わさっている週案日誌の園もある。公立園でも異動があればその園の様式で書く必要があるため、どの園に就職しても記載できるようにするために、学生に参考資料を見せながら様々な様式の月案・週案の書き方を説明した。ただし月案や週案であっても、基本的には保育所実習や幼稚園実習で作成した部分指導案や日案の書き方と同じであり、「先月・先週末までの子どもの姿」や「ねらいと内容」、「子どもの生活・遊びの姿(日課)」、「保育者の指導・援助」、「環境構成」などの指導計画に盛り込まなければならない事項は基本的に同じであることを説明した。その上で、月案・週案には、「健康・安全」欄や「家庭・地域との連携」欄、「職員間の連携」欄、「食育」欄、

「保育教材」を具体的に列挙する欄や「行事」の欄、保育所の場合は「養護」の欄があるため、それらについても記載できる必要があることを説明した。また月案や週案は、1 か月や1 週間の内容を大まかに書くだけではなく、1 週間単位または1 日単位の図表の様式になっており、その週・その日に取り組む活動を時系列で細かく記載する様式もあるため、表の中に継続して数日取り組む活動は線を延ばして何日間行うのかが分かるように記載したり、今日1 日のみ取り組む活動、行事や検診などの様々な取り組みも分かるように、時系列で示すことが必要であることを説明した。さらに園によっては、月案や週案の計画部分に対する保育日誌の位置づけと同じ「反省・評価」欄がある指導計画もあるため、月のねらいや週のねらいが達成できたかどうかを、子どもの育ちや保育者の自己評価の点から記載するように伝えた。

他にも、異年齢・混合クラスの指導計画の書き方では、例えば3歳から5歳の混合クラスであっても、3歳・4歳・5歳に共通するねらいや内容があれば、3歳・4歳・5歳別の発達に合わせたねらいや内容もあることを踏まえ、その点が分かるように記載することを説明した。また特別支援の指導計画の書き方の例なども示し、その子どもの発達の姿を捉えた上でのねらいや保育者の指導・援助の方法を記載するように解説した。

(4) 3歳未満児の指導計画の理解

保育所・幼保連携型認定こども園の3歳未満児は、月案において個別の指導計画を作成したり、クラスの全体計画とともに個別の指導計画部分を盛り込んだりしなければならないが、その際には子どもの情緒、運動、感覚、人間関係、遊び、食事・排泄・睡眠などの生活面や養護・教育について、個別の姿とねらい・内容などを記載することを説明した。特に0歳児の乳児保育は、平成29年の保育指針の改訂により、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域を、身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」、社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」、精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」の3つの分類に変更された。そのため乳児はこの3つの区分を意識しながら記述するが、1歳から3歳未満児は従来の「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域で子どもの育ちを捉えるため、乳児保育の「健やかに伸び伸びと育つ」は「健康」の領域、「身近な人と気持ちが通じ合う」は「人間関係」と「言葉」の領域、「身近なものに関わり感性が育つ」は「環境」と「表現」の領域として捉え、0歳児から1歳児への育ちのつながりを意識して計画・評価していく視点を忘れないようにすることを説明した。

(5) 「10月の運動会の取り組みを中心とした月案」の作成課題

授業の中で様々な月案や週案の様式や書き方を説明した上で、授業の最終回にレポート作成として3・4・5歳児のいずれかの学年の10月の月案を書く課題を出した。課題内容は、10月末に運動会がある想定で、クラス担任として運動会で発表する活動を2種類考え、その活動をどのように取り入れていくのかを10月始めから活動の展開も含めて記載すること、その活動は親子競技ではなくクラスの子もたちと担任1人で完結する活動で、10月末の運動会で発表できる内容にすること、2種類の活動を週の中でどのように展開していくかを示した、月案の中に週案が組み込まれたタイプの月週案を書くこととした。また活動案2種類は、ありきたりのもので

はなく、教材研究を深めた上で子どもたちがくり返し楽しんで取り組める活動にし、単発的・イベント的な活動にならないようにすること、その2種類の活動内容と保育の展開が分かるように記載すること、合わせて0～5歳児の認定こども園の運動会と想定して、0歳から5歳児までの運動会の発表内容も記載した園の運動会のプログラム(A4サイズを半分に折ったA5サイズ横書き、保護者に配布するものとしてイラストも貼付)も作成することとした。さらに、「教育方法の研究」の授業は幼稚園免許の必修科目であるため、対象児を3歳以上児で計画すること、この授業は情報機器の操作を含む教職関係の指導法に関する科目のため、月週案や運動会のプログラムはパソコンのWord・Excelソフトを使って作成することとした。参考に月週案作成の資料⁴⁾を学生に配布した。

4. 結果と考察

以上のような保育や保育実践、指導計画に関する講義を行った上で、学生が実際に指導計画と要録を書く活動を課題として取り入れた。

1) 結果

(1) 日案の作成技術の習得状況

幼稚園実習の9月と10月の2週間ずつの実習の間に後期授業が3週間ほど入るが、その間に子どもの遊びを中心とした日案の書き方を指導し、9月の幼稚園実習中に配属されているクラスを想定した日案を作成する課題を学生に出した。学生は参考資料(図4)⁵⁾をもとに、同レベルの指導案を書くように言ったが、ほぼこの程度の文章をB4で1～2枚、幼児の活動(時程)と遊びの環境図、指導援助欄の表をB4.1枚程度で全員書くことができるようになった。

(2) 要録の記述にみる幼児理解と幼児のエピソードを記録する技術の習得状況

2年後期の「保育内容総論」の授業の最終課題として、3～5歳児の4名分の要録を書く課題を出したが、「指導上参考となる事項」の欄もほとんどの学生が欄いっぱい記述し、記述の分量が足りない

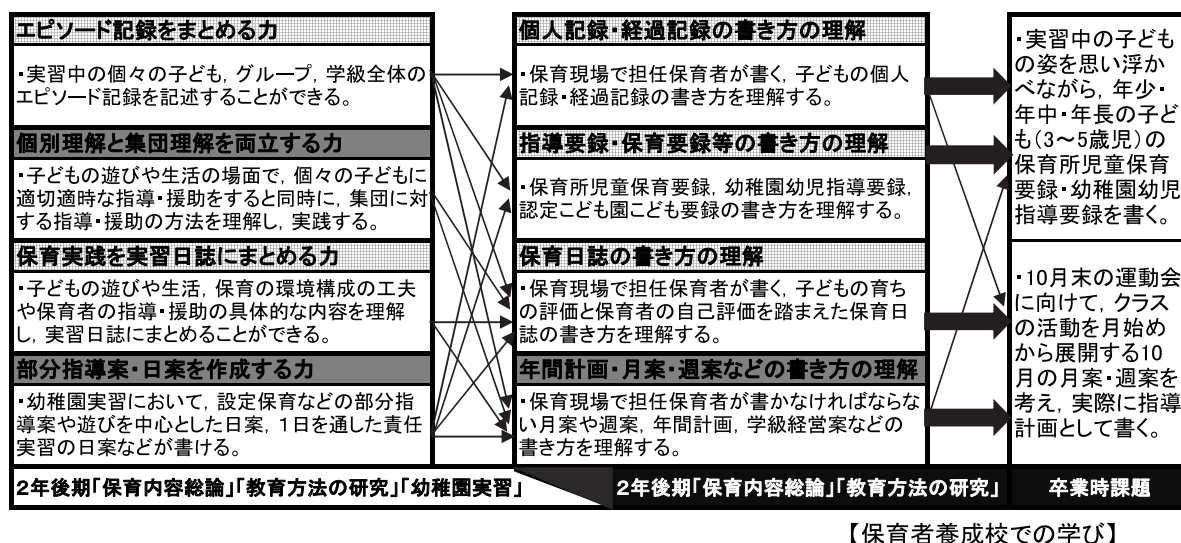


図5. 短大2年次10月～2月の学びのマップ

といったことは見られず、また5領域の内容を偏りなく記述している学生がほとんどであった。例えば「身辺整理が得意ではなく、登園するとカバンを放置し遊び始めることが多かった。片付けの方法や遊び始める前には自分のものをロッカーに入れることを丁寧に伝え、できたときはしっかり認めることで自分から整理するようになった」「園庭ではサッカーを友達と意欲的にする姿があった。最初は自分がずっとボールをもっていないと気が済まず、泣き出すこともあったが、友達と共に遊ぶ楽しさに気づいたり、我慢することを学び、みんなで遊べるようになった」「自分の思いや考えを全員の前で伝える際は恥ずかしがって話すことを拒む姿もある。話すことに気持ちが向くまで順番を後回しにしたり、あたたく見守りながら保育者が声をかけることで、次第に話すことができるようになってきた」「虫が大好きで友達を誘い、虫捕りをして遊んでいる。知らない虫を捕まえた時は図鑑で調べる姿もあった」「自分の気持ちを一言で伝えることが多いので、なんでそう思ったのかなど、保育者が本人の考えを引き出すように促すと、少しずつ自分の思いを言葉で伝えるようになった」「粘土や新聞紙を使った表現活動が好きで様々な作品を作る。想像力が豊かで、他の子どもたちが思い浮かべないような発想がある」と

いうように、子どもの良い面やその子らしさを記述しており、一方子どもの課題面については「保育者が～するように伝える中で子どもが〇〇できるようになってきた」など、保育者の指導・援助の内容と関連づけながら子どもの育ちの変容過程を要録の限られたスペースの中に表記していた。つまり子どもの行動の特徴と保育者の指導の過程を5領域の観点からバランスよく記述できるようになっており、子どもの多方面の育ちが伝わるようなエピソード記録を端的にまとめる手法が身についていた。

（3）月週案の作成に見る指導計画立案の習得状況

2年後期の「教育方法の研究」の授業の最終課題として、3～5歳児を対象とした10月の月週案を書く課題を出したが、全員A3サイズで2枚以上の指導案をパソコンで作成していた。月週案の項目として、「先月の子どもの姿」や「今月のねらい」の他に、「健康・安全」「家庭・地域との連携」「職員間の連携」「食育」「保育教材」「行事」の欄を作り、どの学生も適切に記入していた。「内容」と「子どもの生活・遊びの姿（日課）」、「保育者の指導・援助」、「環境構成」の部分については、どの学生も記入していたが、構成方法が学生により異なっており、月案として1つの枠で記載する学生もいれば、週案

部分にこれらを組み合わせて記載している学生もいた。この中で「子どもの生活・遊びの姿（日課）」の部分は「保育内容」という枠を作り、その中に「養護」と「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域を記載した欄を作り、5領域の側面から内容を記載している学生もいた。週案部分については、第1週、第2週、第3週、第4週と4つの枠を作り、そこに「内容」や「子どもの生活・遊びの姿（日課）」、「保育者の指導・援助」、「環境構成」を週別に記入している学生もいれば、週別の枠をつくりながらも、子どもの活動やねらいが週にまたがる場合は、図などで線を伸ばして継続して取り組むことも分かるような書き方をしている学生もいた。

2) 考察

要録についてはあまり養成段階で学生に書かせることはしないが、本学では子どものエピソード記録の取り方を1年夏に学生が課題として取り組み、学生が自分なりに子どもに着目したエピソード記録を書いた上で、1年後期の授業でエピソード記録を分析する視点を学び、それをもとに2年の夏の保育所実習・幼稚園実習でエピソード記録とそれにかかわる保育者の指導・援助の内容を継続的に記録にまとめることを行った。それゆえ、そのエピソード記録作成の延長として子どもの要録を書く課題を出してみたが、結果として学生が子どもの育ちを5領域の視点からまとめることが卒業時に可能であることが分かった。

また指導計画については、卒業前に立てる最後の指導計画として、学生は運動会の活動を含んだ10月の月案を作成する課題に取り組んだが、ひと月の中で子どもの活動や保育をどう展開するのかといったイメージを持ちながら指導計画を書く意識は、この月週案を作成する過程で身についたのではないと思われる。実際にひと月分の保育を進めていくという感覚がないままに月週案を書いているため、あくまで架空のもので実態の伴わないものであるが、保育現場に出た際には長期的な指導計画を書くための書き方の原則や様々な月週案の様式を参考にしながら書くこと、場合によっては自分で参考になる指

導計画を集めて書き方を工夫する知識をもって卒業することが大事であると考えられる。就職した園により指導計画の作成の種類や様式は異なるため、どのような指導計画の様式にも対応できる指導計画立案の原則論をきちんと習得した上で、保育現場で保育の実務ができる即戦力を学生が身につけることが重要であると思われる。

5. おわりに

短大2年間のうち2年後期から卒業時までの間に、学生が保育者として獲得しなければならない保育に関する知識・技能について、学生の習得・成長過程を踏まえて授業実践を行った。その際、2年次の幼稚園実習後の状態からさらに保育者として身につけるべき保育に関する記録と計画の内容を含んだ授業内容にした結果、学生が子どものエピソード記録の書き方と保育者の指導・援助に関連づけた保育記録のまとめ方、子どもの要録の書き方、月案や週案などの指導計画の立案方法の理解と作能力を身につけたといえる（図5）。養成校での保育の指導法や指導計画の立案などの保育実践に関する学びが、卒業後に保育現場で働く学生にとっては保育者の実務につながることから、短大2年間の学びの終了時にこの水準まで保育の知識・技能を高めておくことは極めて重要であると思われる。今後は、第2期から第3期の2年次に行っている授業実践である、学生がDVDを見ながら保育者の子どもへのふさわしいかわり方や環境構成の視点について学ぶ教育方法についても検討していきたい。

注・引用文献

- 1) 本学における実習は、「保育実習Ⅱ」として2年次8月に10日間の保育所実習を、「教育実習」として2年次9月と11月に各2週間ずつの計4週間の幼稚園実習を行っている。教育実習は週単位で実習期間を設定するが、近年、週休二日制や祝日の増加により幼稚園実習の出勤日数が減少していることから、本学では4週間以上実質勤務が20日以上になるようにし、実習での学びが薄くならないように配慮している。

- 2) 平成29年の保育所保育指針の改訂により、平成20年版では「保育課程」と呼んでいたカリキュラムを「全体的な計画」と呼ぶようになった。
- 3) 月案や週案などの書き方の参考例として、角尾和子『幼児教育・保育原理』文化書房博文社、1997年、134-135頁、待井和江・福岡貞子『乳児保育』ミネルヴァ書房、1997年、214-215,218-219頁、荒井湧『異年齢児の保育カリキュラム』ひかりのくに、2003年、144-145頁などを参照しながら授業が解説した。
- 4) 諏訪きぬ『ききょう保育園の保育計画（保育課程）』新読書社、2008年
- 5) この日案は筆者が日案の記載例として示したものであり、学生の作成した指導計画ではない。

(受稿 平成30年11月19日, 受理 平成30年12月25日)

